氏　　名　大平晃久（おおひら てるひさ）
学位の種類　博　士（人間・環境学）
学位記番号　人博第213号
学位授与の日付　平成15年11月25日
学位授与の要件　学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻　人間・環境学研究科人間・環境学専攻
学位論文題目　場所をめぐる意味に関する研究
——構築主義的立場から——

論文調査委員　（主査）教授 金坂清則　教授 山田　誠　教授 山梨正明

論文内容の要旨

場所は今日，人文地理学や関連分野において重要な概念となっている。本論文は，場所を客観的な実在ではなく，社会の中で言語・言説を通して構築されていくものとしてとらえ，その構築のプロセスを隣接分野にも及んで理論的に考察するとともに，場所をめぐる歴史や文化に関する諸事例を多面的に検討することによって場所の構築の諸相を構築主義の立場から考察するものである。言語論的転回後の人文科学が共有する，言語・言説を重視した視点からは，場所はわれわれ自身が作り出す表象であり，社会的・言語的な構築物として把握される。

本論文は大きく2部構成をとり，その前の序章と第Ⅱ部のあとの終章を合わせ，全10章から構成される。

序章においては，場所や構築主義などのいくつかの基本的な概念の整理を行うとともに，本論文の目的と課題を示す。

第Ⅰ部「場所の構築の理論的考察」は3つの章から構成され，場所が社会の中で言語・言説を通して構築されるプロセスを理論的に考察する。そのうち第1章と第2章では，認知言語学と言語哲学を援用して基礎的な検討を行った。まず第1章では，個人名を中心に行われてきた固有名論の考え方やその成果を地名に適用することによって，場所が地名によって直接指示される対象であると従来考えられていたのは正しくないことを明らかにした。これによって場所が，対象を一般化するとともに分類する，能動的な認識上のプロセスであるカテゴリー化の能力に基づいて認識されていることが明らかになった。次いで第2章では，カテゴリー化と同様にわれわれの認識に関わる主要なテーマである，比喩的認識を取り上げた。従来の研究に対する批判的検討を加えつつ，われわれが場所を認識し意味を織り込んでいく上で，メタファー認識，メトニミー認識，シネクドキ認識のそれぞれが，極めて重要な役割を果たしていることを論じた。またあわせて比喩的認識と地図的思考との深い関連についても明らかにした。このように，場所の言語的な構築物としての性格を明らかにした上で，第3章では，あらゆる事象を言説によって作り上げられていくものと把握する構築主義の方法論を検討した。既往の場所研究における構築主義的アプローチを整理した上で，歴史学や文化人類学における構築主義をめぐる論争について検討し，経験的研究の方法論として構築主義的アプローチには客観主義的研究とは異なる意義があることを示した。

以上によって，場所の社会的・言語的構築プロセスを基礎的な段階から具体的な経験的研究の段階まで，全体として説明することが可能になった。

第Ⅱ部「場所に関わる言説と実践」には5つの章を設け，場所の歴史や文化に関わる言説や実践を具体的に考察するとともに，第Ⅰ部における議論，とりわけ第3章で考察した構築主義的アプローチの有効性を考察した。そのうち第4章と第5章は，地域にある身近な歴史遺産を事例としている。第4章では兵庫県播磨地方における陣屋，第5章では全国4カ所の城下町における旧武家地内の農地を事例として，それらがどのように記述され，また現地の整備が行われているかに焦点を当てた。そして，地域アイデンティティを強調する言説の中で，歴史遺産がさまざまに作り上げられたり，無視されたりしていることを明らかにするとともに，景観が意図的な意味づけに大きく関与することを明らかにした。続く第6章では，香川県三野町大見・下高瀬の墓制を事例として，かつての民俗学界全体の両墓制を特別視する風潮の中で，この地域の墓制が両

墓制として発見され，記述されたことを示すとともに，対象地域の墓制が両墓制として単純に括れるものではなく，村落の形成過程を反映した複雑なものであることを明らかにした。

以上のような言説と文化的事象の基本的な関係の検討をふまえ，第7章では岐阜県岩村町のまちづくりを文化の客体化として論じ，城下町の景観保全やさまざまなイベントの創出といった取り組みが，町の文化全体の統一感を強めるように巧みに意味づけられていることを明らかにした。第8章では，かつて小さな港町だった香川県の汐木という集落について，この集落をはさむ2つの町の郷土誌の言説が対立していることを明らかにし，次いで，2つの郷土誌が自らの町の歴史的重要性を主張する背景をなす，いわば「公的な記憶」の対立に，言説の対立が根ざすことを明らかにした。

最後に，終章では，今後の研究課題を述べるとともに，構築主義的アプローチが有する倫理的な性格についても述べた。

論文審査の結果の要旨

本学位申請論文は，今日の人文地理学や関連分野において重要な概念になっている場所に焦点を当て，場所がさまざまな意味を帯びた対象として社会的・言語的に構築されていくプロセスを理論的に解明するとともに，歴史や文化に関する諸事例に基づく，より具体的な研究を通して理論的説明との統合を図ろうとした，意欲的かつ独創的な研究である。

本論文は，序章および第Ⅰ部「場所の構築に関する理論的考察」，第Ⅱ部「場所に関わる言説と実践」と終章より構成される。第Ⅰ部では，まず認知言語学と言語哲学の考え方を援用した基礎的な検討を行い，場所の構築プロセスにおいて，カテゴリー化と比喩的認識が果たす役割を明らかにした。次いで，あらゆる事象を言説によって作り上げられていくものとして把握する，構築主義的なアプローチの意義や問題点・可能性を，歴史学や文化人類学における議論の検討も通して明らかにした。その結果，場所の社会的・言語的な構築プロセスについて，最も基礎的な段階から経験的研究の段階まで，全体を通した理論的な説明が得られた。第Ⅱ部では，こうした理論的考察を受けて，日本各地での場所の歴史や文化に関わる言説や実践活動を具体的に考察した。まず歴史遺産と民俗学的事象を事例として取り上げ，これらが言説の中で何らかの価値を持ったものとして構築されたり無視されたりしてきたことを明らかにした。次いで，まちづくりを取り上げ，これが文化的事象の新たな関連づけや意味づけを伴う，地域住民自身による文化の客体化であることを示した。最後に，隣接する2自治体の郷土誌における，同一の場所をめぐって対立する言説が，それぞれの「公的な記憶」と密接に結びついていることを明らかにした。この結果，場所が社会的・言語的構築物であることが解明され，場所をめぐる経験的研究における構築主義的アプローチの有効性が示された。

本論文は以下の4つの点で高く評価される。第1点は，本論文が認知言語学や言語哲学の分野における議論を十分に学び取り，よく咀嚼した上で，場所の構築という人文地理学における認識論的な研究に適用している点である。カテゴリー化や比喩的認識といった，従来の人文地理学においてはほとんど導入されていなかった新たな議論の方向性が示され，しかもその議論は地理的事象を一般理論の中に解消するのではなく，地理的事象の独自性が追求されており，また従来からの人文地理学の理論的な課題との接合も図られている。その意味で，本論文は人文地理学における認識論とそれを含む基礎理論研究をはじめ，地名研究，認知・行動地理学研究に影響を与えると考えられる，優れて論争的，野心的な研究であり，学界でも注目されている。

第2点は，こうした認識論的な関心が理論のみに終始せず，構築主義的アプローチの考察を介して，経験的研究を実践する上での問題意識につなげられている点である。そのことはまた，本論文が場所の社会的・言語的な構築プロセスについて，最も基礎的な段階から経験的研究の段階まで，全体を通した理論的な説明を行っているということでもある。

第3点は，本論文におけるカテゴリー化や固有名，比喩的認識に関する考察が，理論の地理的事象分析への援用に留まらず，認知言語学や言語哲学の分野にとっても意義のある成果を含んでいるという点である。従来，場所や地名はこれらの分野においてはほとんど議論されておらず，この問題を突いた本論文は，カテゴリー化や固有名，比喩的認識の理論そのものに変更をもたらす可能性もある。その点で本論文の貢献は人文地理学の枠を越えている。

第4点は，本論文においては多彩な事例研究が含まれ，それらが構築主義的アプローチをとる結果，実証主義のみの視点からはなし得ない，興味深い成果が得られている点である。

文章には若干，難解な表現があり，論理の展開にもやや荒削りな部分がなくはないが，それらを越えた意義を本論文は有

している。今後は，場所の社会的・言語的な構築プロセスの理論的考察をさらに深めるとともに，身体論や認知地図研究に考察をつなげていくこと，さらに記憶という主題の考察をより深めることを通して一層の研究の進展が期待できる。

以上のように，本学位申請論文は，認知言語学と言語哲学の先端的な議論を，経験的研究における構築主義的アプローチに結び付け，場所の社会的・言語的な構築プロセスの全体像を明らかにすることによって，人間と人間社会・環境の関係の新たな理解を，人文地理学を主とする学際的な立場，広い視座から提示している。その上で，日本各地の地域社会における歴史や文化に関する具体的な事例に即して構築主義的アプローチの有効性を多面的に示すことにも成功している。従って，人間・環境学研究科人間・環境学専攻人間社会論講座（比較地域構造論）にふさわしい研究と評価される。

よって本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また，平成15年6月6日，論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果，合格と認めた。